

古今和歌集

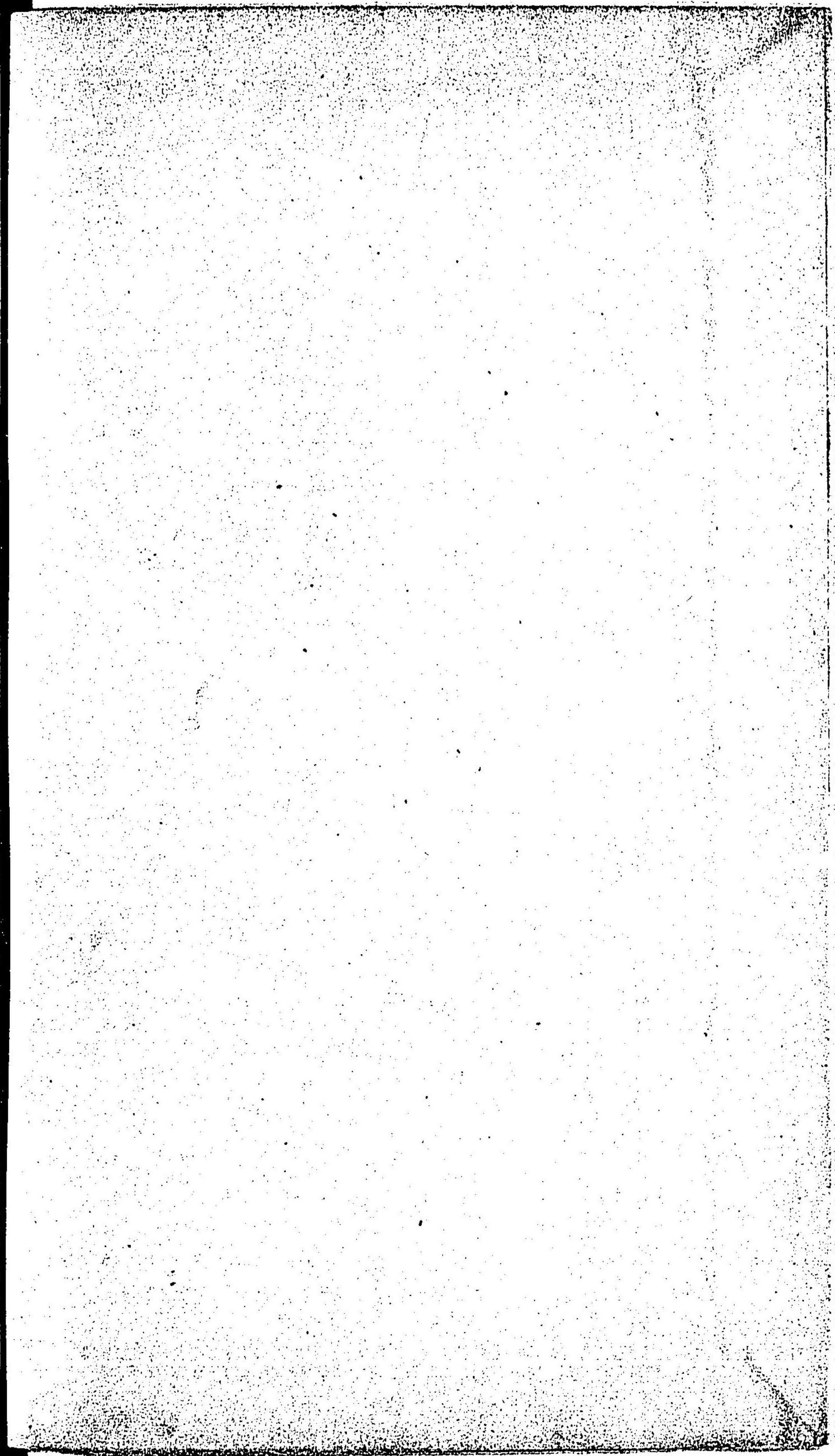
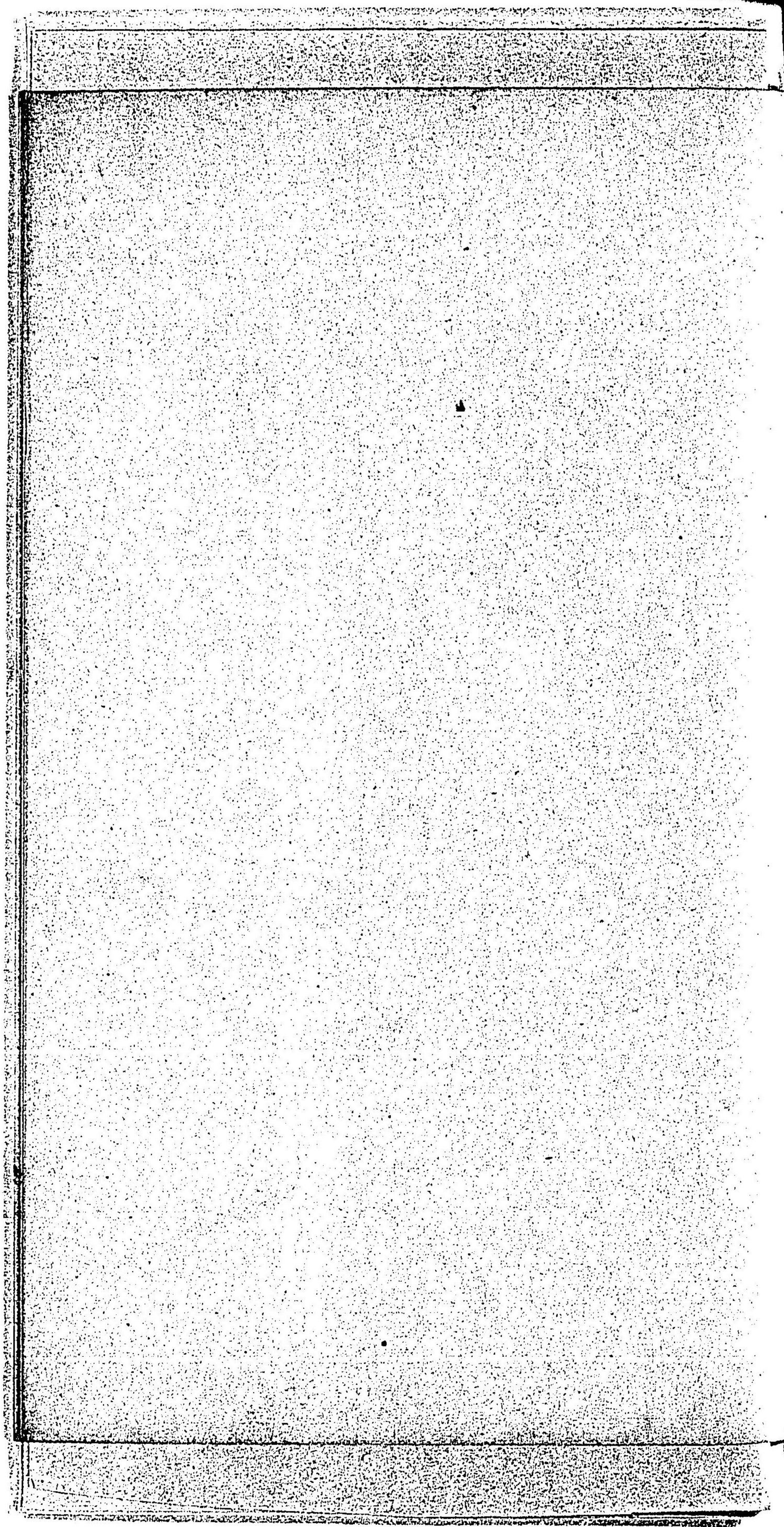
下



255
234

物







古今和歌集卷第十一



音にのみきくのしら露よるはたきてひるは思ひにあへすけぬへし

紀貫之

よしの川いはなみたかく行く水のはやくそひをたもひそめてし

藤原勝臣

しら波のあとなきかたにゆくふねも風そたよりのしらへなりける





在原元方

たごは山たごにきくつゝあふさかのせきのこなたに年をふるかな  
立かへりあはれこそたもふよそにても人にこゝろをたきつしら浪  
貫之

世の中はかくこそありけれふく風のめに見ぬ人もこひしかりけり

右近のむまはのひをりの日むかひにたてたりけるく

るまの下すたれより女のかほのほのかに見えければ

よみてつかはしける

在原業平朝臣

みすもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさん

返し

よみ人しらす

しるしらぬ何かあやなくわきていはん思のみこそしるへなりけれ

春日の祭にまかれりける時に物見に出たりける女の

もごに家をたつねてつかはせりける

壬生忠岑

春日野のゆきまをわけてたひ出くるくさのはつかに見えし君はも

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のも

ごにのちによみてつかはしける 貫之

やまさくらかすみのみよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ

題しらす

元方

たよりにもあらぬたもひのあやしきは心をひごにつくるなりけり

九河内野恒

はつ雁のはつかにこゑをきくしよりなかそらにのみ物を思ふかな

貫之

逢ふことは雲のはるかになるかみの音にきくつゝこひわたるかな



よみ人しらす

かたいごをこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせん  
夕くれはくものはたてにもものそ思ふあまつそらなる人をこふこて  
かりこもの思ひみたれて我こふこいもしるらめやひこしつけすは  
つれもなき人をやねたくしら露のわくごはなけきぬごはしのはん  
ちはやふるかものやしろのゆふたすき一日も君をかけぬ日はなし  
我こひはむなしきそらにみちぬらしともひやれごもゆく方もなし  
するかなる田子の浦なみたぬ日はあれごも君をこひぬ日はなし  
ゆふつくよさすやをかへの松の葉のいつごもわかぬ戀もするかな  
あしひきの山した水のこかくれてたきつごころをせきそかねつる  
よしのかはいはきりごほしゆく水の音にはたてしこひはしぬごも  
瀧つせのなかにもよごはありてふをなごわか戀のふちせごもなき

やまたかみしたゆく水のしたにのみ流れてこひんこひはしぬごも  
思ひいつるときはの山の岩つごしいはねはこそあれ戀しきものを  
ひごしれす思へはくるしくれなるの末つむはなのいろにいてなん  
秋の野のをはなにまじりさくはなの色にやこひんあふよしをなみ  
わかそのく梅のほつえにうくひすのねに鳴きぬへき戀もするかな  
あしひきの山ほごきすわかごや君にこひつごいねかてにする  
夏なれはやごにふすふるかやり火のいつまで我身したもえにせん  
こひせしごみたらし川にせし御我かみはうけすそなりにけらしも  
あはれてふごごたになくは何をかは戀のみたれのつかねをにせん  
たもふには忍ふるごごそまけにける色にはいてしご思ひしものを  
我こひは人しるらめやしきたへのまくらのみこそ知らはしるらめ  
あさちふのをごごの原ごのふごも人しるらめやいふひごなしに



人しれぬたもひやなそごあし垣のまちかけれごもあふよしのなき  
たもふごもこふごもあはんものなれやゆふ手もたゆくごくる下紐  
いて我をひごなごかめそたほ舟のゆたのたゆたにも思ふころそ  
伊勢の海につりする蟹のうけなれやごころひごつを定めかねつる  
いせのうみのあまのつり繩打はへてくるしごのみや思ひわたらん  
なみた川なになかみをたつねけん物たもふごきの我身なりけり  
たねしあれは岩にも松はたひにけり戀をしごひはあはさらめやも  
朝なくたつかはきりの空にのみうきてたもひのある世なりけり  
わすらるゝ時しなけれはあしたつの思ひみたれて音をのみそなく  
からころもひもゆふくれになる時はかへすくもひごそこひしき  
よひくゝに枕さためんかたもなしいかにねし夜かゆめに見えけん  
ごひしきに命をかふるものならはしにはやすくそあるへかりける

人の身もならはしものをあはすしていさごころみん戀やしぬるご  
このふれはくるしきものを人しれす思ふてふごごたれにかたらん  
ごん世にもはやなりなごんめの前につれなき人をむかしご思はん  
つれもなき人をこふごて山ひこのこたへするまでなけきつるかな  
ゆく水にかすかくよりもはかなきは思はぬひごをたもふなりけり  
人を思ふごころは我にあらねはや身のまごふたに知られさるらん  
たもひやるさかひはるかになりやするまごふ夢路にあふ人のなき  
夢のうちにあひ見ん事をたのみつごくらせる宵はねんかたもなし  
ごひしねごするわさならしうは玉のよるはすからに夢に見えつご  
なみた川枕なかるごうきねにはゆめもさたかに見えすそありける  
戀すれはわか身はかけごなりにけりさりごて人にそはぬものゆゑ  
かごり火にあらぬ我身のなそもかくなみたの川にうきてもゆらん



かゝりひのかけこなる身のわひしきは流れて下にもゆるなりけり  
はやき瀬にみるめたひせは我そてのなみたの川にうゑまじものを  
たきへにもよらぬ玉葉の浪のうへにみたれてのみや戀わたりなん  
あしかものさわくいり江のしら浪のしらすや人をかくこひんこは  
入しれぬたもひをつねにするかなる富士の山こそわか身なりけれ  
こふごりのこゑもきこえぬたく山のふかきこゝろを人はしらなん  
あふ坂のゆふつけごりもわかこゝく人やこひしきねのみなくらん  
あふさかの關になかるゝいはし水いはてこゝろにたもびこそすれ  
うき草のうへはしれけるふちなれやふかきこゝろを知る人のなき  
うちわひてよはゝん聲にやまひこのこたへぬ山はあらしこそ思ふ  
こゝろかへするものにもかかたこひは苦しきもの三人にしらせん  
よそにして戀ふれはくるしいれひものたなし心にいさむすひてん

春たてはきゆるこほりののこりなく君かこゝろはわれにさけなん  
あけたては蟬のをりはへなきくらし夜はほたるのもゑこそわたれ  
夏蟲の身をいたつらになすこゝもひこつたもひによりてなりけり  
夕されはいこゝひかたきわか袖にあきのつゆさへたきそはりつゝ  
いつこても戀しからすはあらねども秋のゆふへはあやしかりけり  
秋の田のほにこそ人をこひさらめなごかこゝろにわすれしもせん  
あきの田のほのうへをてらす稻妻のひかりのまにも我やわするゝ  
人めもる我かはあやな花すゝきなごかほにいてゝ戀すしもあらん  
あは雪のたまれはかてにくたけつゝ我ものたもひのしけきこゝろ哉  
たく山のすかのねこのきふる雪のけぬごかいはんこひのしけきに



古今和歌集卷第十二

戀歌二

題しらす

小野小町

思ひつゝぬれはや人の見えつらんゆめご知りせはさめさらましを  
うたふねに戀しきひとを見てしより夢てふものはたのみそめてき  
いとせめてこひしきこきはうはたまのよるの衣をかへしてそきる

素性法師

あき風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ここに

しもついつもてらに人のわさしける日真せい法師の

たうしにていへりけることはを歌によみて小野小町



かもごにつかはしける

安倍清行朝臣

つゝめごも袖にたまらぬしらたまは人を見ぬめのなみたなりけり

返し

小町

たろかなるなみたそ袖にたまはなす我はせきあへす瀧つせなれば

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原敏行朝臣

こひわひて打ぬるなかにゆきかよふ夢のたゝちはうつゝならなん

住の江のきしによるなみよるさへやゆめのかよひち人めよくらん

をのゝよしき

わか戀はみやまかくれの草なれやしけさまされこしるひごのなき

紀友則

よひのまもはかなく見ゆるなつ森にまごひまされる戀もするかな

夕されはほたるよりけにもゆれごもひかりみねはや人のつれなき

さゝの葉にたく霜よりもひこりぬる我ころも手そさえまさりける

我やごのきくのかきねにたく霜のきえかへりてそこひしかりける

川の瀬になひくたまものみかくれて人にしられぬこひもするかな

壬生忠岑

かきくらしふる白雪の下きえにきえてもの思ふころにもあるかな

藤原興風

君こふるなみたのここにみちぬれはみをつくしごそ我はなりける

しぬる命いきもやすることろみに玉のをはかりあはんといはなん

わひぬれはしひて忘れんと思へごも夢といふものそ人たのめなる

よみ人しらす

わりなくもねても覺めても戀しきかことろをいつちやは忘れん



戀しきにわひてたましひまごひなはむなしきからの名にや残らん

紀貫之

君こふるなみたしなくはからころもむねのあたりは色もえなまし

題しらす

よごとも流れそゆくなみた川ふゆもこほらぬみなわなりけり

夢路にもつゆやたくらんよもすからかよへる袖のひちてかわかぬ

素性法師

はかなくて夢にもひごをみつる夜はあしたの床そたきうかりける

藤原忠房

いつはりのなみたなりせはから衣しのひにそてはしほらさらまし

大江千里

音になきてひちにしかごも春雨にぬれにこそてごごはごごたへん

敏行朝臣

我ごごくものやかなしきほごごきす時そごもなく夜たごなくらん

貫之

さつき山ごすゑをたかみほごごきすなく音そらなる戀もするかな

九河内躬恒

秋霧のはるごごきなきごごろにはたちゐのそらもたもほえなくに

清原ふかやふ

むしのごご澤にたてごはなかねごもなみたのみこそ下になかるれ

これさたのみこの家の歌合の歌　よみ人しらす

秋なれはやまごよむまてなくしかに我たごらめやひごりぬる夜は

題しらす

貫之

秋の野にみたれてさける花のいろのちくさに物をたもふころかな



野恒

ひこりしてものを思へは秋の田のいなはのそよこいふひとのなき

深養父

人をたもふころは雁にあらねとも雲るにのみもなきわたるかな

忠岑

あき風にかきなすことこのころにさへはかなく人のこひしかるらん

貫之

まこもかる淀のさはみつあめふれは常よりここにまさるわかこひ

大和に侍りける人につかはしける

こえぬまはよしのゝ山のさくら花ひこつてにのみきゝわたるかな

やよひはかりにもものゝたうひける人のもこに又人ま

かりてせうそこすこきゝてよみてつかはしける

露ならぬころを花にたきそめて風ふくここにものたもひそつく

題しらす

坂上是則

わか戀にくらふのやまのさくら花まなくちるごもかすはまさらし

むねをかのとほより

ふゆ川のうへはこほれる我なれやしたになかれてこひわたるらん

忠岑

たきつ瀬にねさしこゝめぬ浮草のうきたるこひもわれはするかな

友則

よひくにぬきて我ぬるかりころもかけて思はぬごきのまもなし

あつまちのさやのなか山なかくになにしか人をたもひそめけん

しきたへの枕の下に海はあれごひごをみるめはたひすそありける

年を経てきえぬたもひはありなからよるのたもごは猶こほりけり



貫之

わか戀はしらぬ山路にあらなくにまごふこころそわひしかりける  
くれなるのふりいてなく涙にはたもこのみこそいろまさりけれ  
しら玉こ見えしなみたも年ふれはからくれなるにうつろひにけり

躬恒

なつ虫をなにかいひけんこころから我もたもひにもえぬへらなり

忠岑

風ふけはみねにわかるくしら雲のたえてつれなききみかこころか  
月かけにわか身をかふるものならはつれなき人もあはれこや見ん

深養父

こひしなはたか名はたし世の中の常なきものこいひはなすこも

貫之

津の國のなにはのあしのめもはるにしけきわかこひ人しるらめや  
手もふれて月日經にけるしらまゆみたきふし夜はいこそねられね  
ひこしれぬ思のみこそわひしけれわかなけきをはわれのみそ知る

友則

ここにいてといはぬはかりそみなせ川下にかよひて戀しきものを

躬恒

君をのみたもひねにねし夢なれはわかこころからみつるなりけり

忠岑

いのちにもまさりて惜くあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり

はるみちのつらき

あつさすひけはもこすゑ我かたによるこそまされこひのこころは

躬恒



わか戀はゆくへも知らずはてもなし違ふをかきりと思ふはかりそ  
我のみそかなしかりけるひこほしもあはてすくせる年しなけれは

深養父

いまははや戀しなましをあひ見んごたのめし事そいのちなりける

躬恒

たのめつゝあはて年ふるいつはりにはこりぬころを人は知らなん

友則

いのちやはなにそは露のあたものをあふにしかへは惜からなくに

### 古今和歌集卷第十三

#### 戀歌三

やよひのついたりしひに人に物をいひてのち  
に雨のそほふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

たきもせずねもせて夜をあかしては春のものごとてなかくらしつ

業平朝臣の家に侍りける女のもこによみてつかはし

ける

敏行朝臣

つれくのなかめにまさる涙かはそてのみぬれて違ふよしもなし

かの女にかはりて返しによめる

業平朝臣



あさみこそ袖はひつらめなみた川身さへなかるさきはたのまん  
題しらす  
よみ人しらす

よるへなみ身をこそほくへたてつれ心はきみかかけとなり  
いたつらにゆきては來ぬる物故に見まくほしさにいさなはれつ  
あはぬ夜のふるしら雪こつもりなは我さへごもにけぬへきものを  
此歌はある人のいはく柿本人丸か歌なり

業平朝臣

秋の野にさゝわけし朝の袖よりもあはて來し夜そひちまさりける

小野小町

みるめなき我身をうらさ知らねはやかれなて蚕のあしたゆく來る

源宗于朝臣

あはすしてこよひあけなは春の日のなかくや人をつらしと思はん

壬生忠岑

有明のつれなく見えしわかれよりあかつきはかりうきものはなし

在原元方

逢ふことのなきさにしよる浪なれはうらみてのみそ立かへりける

よみ人しらす

かねてより風にさきたつ浪なれやあふことなきにまたきたつらん

忠岑

みちのくにありといふなる名ごり川なきなごりては若しかりけり

御春有助

あやなくてまたきなき名のたつた川渡らてやまんものならなくに

元方

人はいさわれはなき名のをしけれは昔もいまも知らすをいはん



よみ人しらす

こりすまに又もなき名はたちぬへし人にくからぬ世にしすまへは  
ひんかしの五條わたりに人をしりたきてまかりかよ  
ひけり忍ひなる所なりければかよよりしもえいらて  
垣のくつれより通ひけるをたひかさなりければある  
しきとつけてかの道に夜ここに人をふせてまもらす  
れはいきけれとえあはてのみ歸りてよみてやりける

業平朝臣

人しれぬわかかよひ路の關もりはよひくここにうちもねなとん

題しらす

貫之

このふれと戀しきときはあしひきの山よりつきのいてとこそ來れ

よみ人しらす

こひくして稀にこよひそあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かすもあらなん

小野小町

秋の夜も名のみなりけりあふといへはこころもなくあけぬる物を

九河内躬恒

なかしごも思ひそはてぬむかしよりあふ人からのあきの夜なれば

よみ人しらす

このよめのほからくさあけゆけはたのかきぬくなるそ悲しき

藤原國經朝臣

明けぬこていまはのこころつくからになごいひ知らぬ思そふらん

寛平御時ささいの宮の歌合のうた 敏行朝臣

あけぬこてかへる道にはこきたれて雨もなみたもふりそほちつと

題しらす

寵



しのゝめのわかれを惜みわれそまつ鳥よりさきになきはしめつる

よみ人しらす

ほごきす夢かうつゝかあさつゆのたきてわかれしあかつきの聲  
玉くしけあけはきみか名たちぬへみ夜ふかくこしを人見けんかも

大江千里

けさはしもたきけんかたも知らさりつ思ひいつるそきえて悲しき  
人にあひてあしたによみてつかはしける

業平朝臣

ねぬるよの夢をはかなみまころめはいやはかなにもなりまさる哉

業平朝臣の伊勢の國にまかりたりける時齋宮なりけ

る人にいごみそかに逢ひて又のあしたに人やるすへ  
なくて思ひをりけるあひたに女のもごよりたこせた

りける

よみ人しらす

君やこしわれやゆきけんたもほえす夢かうつゝかねてかさめてか

返し

業平朝臣

かきくらすこゝろの間にまごひにきゆめうつゝごは世人さためよ

題しらす

よみ人しらす

うは玉のやみのうつゝはさたかなる夢にいくらもまさらさりけり  
さよふけてあまのこわたる月影にあかすもきみをあひみつるかな  
君か名も我名もたてし難波なるみつごもいふなあひきごもいはし  
名取川せとのうもれ木あらはれはいかにせんごかあひ見そめけん  
よし野川水のこゝろははやくごもたきのたごにはたてしごそ思ふ  
こひしくはしたにを思へむらさきのねすりの衣いろにいつなゆめ

小野春風



花すゝきほにいてゝこひは名ををしみ下ゆふ紐のむすほゝれつゝ

たちはなのきよきかしのひにあひしれりける女の許

よりたこせたりける  
よみ人しらす

思ふごちひごりくかこひしなはたれによそへてふちころもきん

返し  
たちはなのきよき

なきこふる涙にそてのそほちなはぬきかへかてらよるこそはきめ

題しらす  
小町

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるご見るかわひしき

かきりなきたもひのまゝによるも來む夢路をさへに入はごかめし

夢路にはあしもやすめすかよへごも現にひごめ見しごはあらす

思へごもひごめつゝみのたかければかはごみなからえこそ渡らね

よみ人しらす

たきつせの早きころをなにしかも人めつゝみのせきごゝむらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 紀友則

くれなるの色にはいてしかくれぬの下にかよひてこひはしぬごも

題しらす  
野恒

冬の池にすむにほごりのつれもなくそこにかよふご人にしらすな

さゝの葉にたくはつ霜のよをさむみしみはつくごも色にいてめや

よみ人しらす

山じなの音羽のやまのたごにたにひごの知るへくわかこひめかも

此うたはある人あふみのうねめのごなん申す  
清原深養父

みつしほのなかれひるまをあひかたみみるめの浦に夜をこそまで

平貞文



しら川のしらすごもいはし底きよみ流れてよくにすまんと思へは

友則

したにのみ戀ふれはくるし玉のをのたえてみたれん人なごかめそ  
わか戀をしのひかねてはあしひきの山たちはなの色にいてぬへし

よみ人しらす

大かたはわか名も湊こきいてなんよをうみへたにみるめすくなし

平貞文

まくらより又しる人もなきこひをなみたせきあへすもらしつる哉

よみ人しらす

風ふけはなみうつきしの松なれやねにあらはれてなきぬへらなり

このうたはある人のいはくかきのもこの人まろかなり

池にすむ名ををしごりの水をあさみ隠るごすれごあらはれにけり

あふことはたまのをはかり名のたつは吉野の川のたきつせのこと  
むら鳥のたちにしわかな今さらにことなしふごもしるしあらめや  
君によりわか名ははなにはるかすみ野にも山にもたちみちにけり

伊勢

しるごいへは枕たにせてねしものをちりならぬ名の空にたつらん



古今和歌集卷第十四

戀歌四

題しらす

みちのくのあさかの沼のはなかつみかつ見る人にこひやわたらん  
あひみすは戀じきこともなからまし音にそひをきくへかりける

よみ人しらす

貫之

いそのかみふるのなかみちなかくに見すは戀じき思はましやは

藤原たけゆき

君こいへは生まれみすまれふこのねのめつらしけなくもゆる我戀

伊勢



夢にたに見ゆこはみえしあさなく我たもかけにはつる身なれば

よみ人しらす

石間ゆくみつの白波たちかへりかくこそはみめあかすもあるかな  
いせのあまの朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

友則

春かすみたなひく山のさくらはな見れごもあかぬ君にもあるかな

深養父

こころをそわりなきものと思ひぬる見るものからや戀しかるへき

九河内野恒

かれはてん後をは知らて夏くさのふかくもひとのたもほゆるかな

よみ人しらす

あすか川ふちは瀬になる世なりごもたもひそめてん人はわすれし

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

たもふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬものにはあるらん

題しらす

さむしろにころもかたしき今宵もや我をまつらんうちのはじひめ

又はうちのたまひめ

君やこんわれやゆかんのいさよひに棋のいた戸もさくすねにけり

素性法師

いま來んといひこはかりになかつきの有明の月をまちいてつる哉

よみ人しらす

月夜よしよこしこ人につけやはこてふに似たりまたすしもあらす

君こそすはねやへもいらしこむらさきわかもこゆひに霜はたくとも

宮城野のもこあらのご萩つゆをたもみ風をまつこご君をこそまた



あなこひし今も見てしか山かつのかきほに咲けるやまこなてしこ  
津の國のなにはたもはすやましろのこはにあひ見ん事をのみこそ

貫之

しきしまのやまこにはあらぬ唐衣ころもへすして違ふよしもかな

深養父

戀しこはたかなつけゝん事ならん死ぬこそたゞにいふへかりける

よみ人しらす

みよし野のたほかはのへの藤なみのなみに思はゝわかこひめやは  
かくこひんものごは我も思ひにきこゝろのうらそまさしかりける  
天のはらふみこゝろかしなる神もたもふなかをはさくるものかは  
あつさ弓ひきのゝつゝらすゑつひに我たもふ人にここのしけゝん  
この歌ある人あめのみかごあふみのうねめに給ひけるこ

なん申す

なつひきの手引の糸をくりかへしここのしけくともたえんと思ふな

此歌はかへしによみて奉りけるこなん

さこ人のここのはなつ野のしけくともかれゆく君にあはさらめやは

藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあ

ひしりてふみつかはせりけるこはにいままうてく

雨のふりけるをなん見わつらひ侍るこいへりけるを

きゝてかの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

かすくゝに思ひたもはすこひかたみ身をこる雨はふりそまされる

ある女のなりひらの朝臣をこころさためすありきす

こたもひてよみてつかはしける　よみ人しらす



たほぬさのひくてあまたになりぬれは思へこえこそ頼まさりけれ  
返し

業平朝臣

たほぬさこ名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふ物を  
題しらす  
よみ人しらす

すまのあまの鹽やくけふり風をいたみ思はぬ方にたなひきにけり  
たまかつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし  
たかりに夜かれをしてかほこきすたこくにしもねたる聲する  
いて人はここのみそよき月くさのうつしこころはいろこごにして  
いつはりのなき世なりせはいかばかり人の言の葉うれしからまし  
いつはりと思ふものからいまさらたかまこごをか我はたのまん

素性法師

あき風にやまの木の葉のうつろへは人のこころもいかごそ思ふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 友則

蟬のこゑきけはかなしな夏ころもうすくやひごのならんと思へは  
題しらす  
よみ人しらす

うつ蟬のよのひごこごのしけくれは忘れぬものゝかれぬへらなり  
あかてこそ思はんかははなれなめそをたに後のわすれかたみに  
忘れなんこたもふ心のつくからにありしよりけにまつそかなしき  
わすれなん我をうらむなほこきす人のあきにはあはんこもせず  
たえすゆくあすかの川のよこみなはこころあるこやひごの思はん  
此歌ある人のいはくなかこみのあつま人かうたなり

よこ川のよこむこひごは見るらめこなかれてふかき心あるものを  
素性法師

そこひなき淵やはさわくやまかはのあさき瀬にこそあた波はたて



よみ人しらす

くれなるのはつ花そめの色ふかくたもひしころわれわすれめや  
かはらの左大臣

みちのくのしのふもしすり誰ゆゑに亂れんこたもふ我ならなくに  
よみ人しらす

たもふよりいかにせよこか秋風になひくあさちのいろここになる  
ちくの色にうつろふらめこしらなくにころし秋の紅葉ならねは

小野小町

あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみんこのみ人のいふらん  
しもつけのをむね

くもり日のかけこしなれる我なればめにこそ見えね身をは離れす

貫之

色もなきころをひこにそめしよりうつろはんこはたもほえなくに

よみ人しらす

めつらしき人を見んこやしかもせぬ我したひものさけわたるらん  
かけろふのそれかあらぬか春雨のふる日こなればそてそぬれぬる  
堀江こくたなきしをふねこきかへりたなし人にやこひわたりなん

伊勢

わたつみこあれにしこを今更にはらはそてやあわごうきなん

貫之

いにしへになほたちかへる心かなこひしきここにもものわすれせて  
人を悉ひにあひしりてあひかたくありければその家  
のあたりをまかりありきけるをりに雁のなくをきこ  
てよみてつかはしける

大伴黒主



思ひいてゝ戀しきときははつかりの鳴きてわたるこ人しるらめや

右のたほいまうちきみすますなりにければかのむか

したこせたりける文こもをこりあつめて返すこてよ

みてたくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉いまはかへしてん我身ふるれはたきこころなし

返し

近院の右のたほいまうち君

今はこてかへす言の葉ひろひたきてたのか物からかたみこや見ん

題しらす

よるかの朝臣

たまほこの道はつねにもまこはなん人をこふこも我かこたもはん

よみ人しらす

またこいはゝねてもゆかなんしひてゆく駒のあしをれ前のたな橋

中納言源ののほるの朝臣のあふみのすけに侍りける

時によみてやれりける

閑院

あふ坂のゆふつけこりにあらはこそ君かゆきゝをなくくも見ぬ

題しらす

伊勢

ふるさこにあらぬものから我ために人のこころのあれて見ゆらん

寵

山かつのかきほにはへるあをつくら人はくれこもここつてもなし

さかゐのひこさね

たほ空はこひしき人のかたみかは物たもふここになかめらるらん

よみ人しらす

あふまでの形見も我はなにせんに見てもこころのなくさまなくに

たやのまもりける人のむすめにいこしのひにあひて

ものらいひけるあひたにたやのよふこいひければい



そきかへるごてもをなんぬきたきていりにけるその

後もをかへすごてよめる

興風

逢ふまでの形見ごてこそごめけめなみたに浮ふもくつなりけり

題しらす

よみ人しらす

かたみこそ今はあたなれこれなくは忘るごきもあらまじものを

### 古今和歌集卷第十五

#### 戀歌五

五條のきさいの宮の西のたいに住ける人にほいには  
 あらて物いひわたりけるをむ月の十日あまりになん  
 ほかへかくれにけるあり所は聞きけれごえ物もいは  
 て又の年の春梅の花さかりに月のたもしろかりける  
 夜こそをこひてかの西のたいにいきて月のかたふく  
 まてあはらなる板しきにふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我身ひとつはもこの身にして



題しらす

藤原なかひらの朝臣

花すゝきわれこそしたにたもひしかほにいてゝ人に結はれにけり

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかましものをたごは川渡るごなしにみなれそめけん

九河内躬恒

我こそくわれをたもはん人もかなさてもやうきご世をこゝろみん

元方

ひさかたの天つそらにもすまなくに人はよそにそたもふへらなる

よみ人しらす

見てもまた又もみまくのほしけれはなるゝを人はいごふへらなり

紀本則

雲もなくなきたるあさの我なれやいとはれてのみよをは経ぬらん

よみ人しらす

はなかたみめならふ人のあまたあれは忘れぬらん数ならぬ身は

うきめのみたひて流るゝ浦なれはかりにのみこそあまはよるらめ

伊勢

あひにあひて物思ふころの我そてにやこる月さへぬるゝかほなる

よみ人しらす

秋ならてたくしら露はねさめするわか手まくらのしつくなりけり

すまのあまの鹽焼ころもをさをあらみまごほにあれや君か来まさぬ

やましろの流のわかこもかりにたにこぬ人たのむわれそはかなき

あひ見ねはこひこそまされみなせ川なにゝふかめて思ひそめけん

あかつきのしきのはねかきもゝはかき君かこぬ夜は我そかすかく

玉かつらいまはたゆこやふく風のたごにもひこのきこえさるらん



わかそてにまたき時雨のふりぬるは君かこころにあきや来ぬらん  
山の井のあさきこころも思はぬにかけはかりのみひこの見ゆらん  
わすれ草たねこらまじを逢ふここのいごかくかたき物こしりせは  
こふれこも逢ふ夜のなきはわすれ草夢路にさへや生ひしけるらん  
夢にたにあふこごかたくなりゆくは我やいをねぬひこやわするこ  
けんけい法師

もろこしも夢に見しかはちかよりき思はぬなかそはるけかりける  
さたののほる

ひこりのみなかめふるやのつまなれは人をしのふの草そたひける  
僧正遍昭

わかやこは道もなきまであれにけりつれなき人をまつこせしまに  
今こむこいひてわかれしあしたより思ひくらしの音をのみそなく

よみ人しらす

こめやこは思ふものから日くらしのなくゆふ暮はたちまたれつこ  
いましはごわひにしものをさかにかにの衣にかよりわれをたのむる  
今はこしと思ふものから忘れつこまたるここのまたもやまぬか  
月夜には来ぬひこまたるかきくもり雨もふらなんわひつこもねん  
うゑていにし秋田かるまで見えこねはけさ初雁の音にそなきぬる  
来ぬ人をまつゆふくれのあき風はいかにふけはかわひしかるらん  
ひさしくもなりにけるかな住の江のまつは若しき物にそありける  
かねみのたほきみ

住の江のまつほこ久になりぬればあしたつの音になかぬ日はなし  
なかひらの朝臣あひしりて侍りけるをかれかたにな  
りにければ父かやまこのかみに侍りけるもこへまか



るこてよみてつかはしける 伊勢

三輪の山いかにまぢみん年ふごもたつぬるひとあらしと思へは

題しらす 雲林院のみこ

ふきまよふ野風をさむみあきはきのうつりもゆくか人のこころの

小野小町

今はこてわか身しくれにふりぬれは言の葉さへにうつろひにけり

返し 小野さたき

人を思ふこころ木の葉にあらはこそ風のまに／＼散りもみたれめ

業平朝臣きのありつねかむすめにすみけるをうらむ

る事ありてしはしのあひたひるはきてゆふさりはか

へりのみしけれはよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかに目には見ゆるものから

返し 業平朝臣

ゆきかへり空にのみしてふるこは我あるやまのかせはやみなり

題しらす かけのりのたほきみ

唐衣なれは身にこそまつはれめかけてのみやは應ひんさたもひし

友則

あき風は身をわけてしもふかなくに人のこころのそらになるらん

源宗于朝臣

つれもなくなりゆく人の言の葉そあきよりさきのもみちなりける

こころそこなへりけるころあひしりて侍りける人の

こはてこころをこたりてのちさふらへりけれはよみ

てつかはしける 兵衛

しての山ふもこを見てそかへりにしつらき人よりまつこえしこて



あひしれりける人のやうやくかれかたになりけるあ  
ひたにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける

こまちかあね

時すきてかれゆくをのゝあさちには今はたもひそたえすもえける

物たもひけるころものへまかりける道に野火のもえ

けるを見てよめる

伊勢

冬かれの野邊さわか身をたもひせはもえても春をまたまじものを

題しらす

友則

水のあわのきえてうき身といひなから流れてなほもたのまるゝ哉

よみ人しらす

みなせ川ありてゆく水なくはこそつひに我身をたえぬとたもはめ

野恒

よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてしこごはわすれし

よみ人しらす

よの中の人のこゝろははなそめのうつろひやすき色にそありける  
心こそうたてにくけれそめさらはうつろふこごもをこからまじや

小町

いろ見えてうつろふものは世の中の人のこゝろの花にそありける

よみ人しらす

我のみや世をうくひすこなきわひん人のこゝろのはなごちりなは

素性法師

思ふともかれなん人をいかにせんあかす散りぬるはなごこそ見め

よみ人しらす

いまはこて君かかれなはわか宿のはなをはひとり見てやしのはん



宗子朝臣

わすれ草かれもやするこつれもなき人のこころにしもはたかなん

寛平御時御屏風に歌かゝせ給ひける時よみてかきけ

る 素性法師

わすれくさ何をかたねと思ひしはつれなきひこのこころなりけり

題しらす

秋の田のいねてふこともかけなくになにをうしこか人のかるらん

紀貫之

はつ雁のなきこそわたれ世の中のひこのこころのあきしうければ

よみ人しらす

あはれこもうしこも物をたもふ時なごかなみたのいごなかるらん

身をうしと思ふにきえぬ物なればかくても経ぬる世にこそありけれ

典侍藤原直子朝臣

あまのかるもに住む蟲の我からごねをこそなかも世をはうらみし

いなは

あひ見ぬもうきも我身のからころも思ひしらすもごくるひもかな

寛平御時きさいのみやの歌合のうた

すかのゝたゝをむ

つれなきを今はこひしと思へごもこころよわくもたつるなみたか

題しらす

伊勢

人しれすたえなましかはわひつゝもなき名そごたにいしまし物を

よみ人しらす

それをたに思ふこごとくわかやごを見きごないひそ人のきかくに

違ふごこのもはらたえぬる時にこそ人のこひしきこごもしりけれ



わひはつる時さへものゝかなしきはいつこを恐ふなみたなるらん

藤原興風

うらみてもなきてもいはんかたそなき鏡に見ゆるかけならすして  
よみ人しらす

ゆふされは人なきこをうちはらひなけかんためこなれる我身か  
わたつみの我身こすなみたちかへりあまのすむてふうらみつる哉  
あらをたをあらすきかへしくても人のこころを見てこそやまめ  
ありそ海の濱のまさここのたのめしは忘るゝここの敷にそありける  
あしへより雲井をさしてゆく雁のいやさほさかるわか身かなしも  
しくれつゝもみつるよりも言の葉のこころの秋にあふそわひしき  
秋かせのふきこふきぬるむさし野はなへて草葉のいろかはりけり

小町

あき風にあふたのみこそ悲しけれわか身むなしくなりぬこ思へは

平貞文

あき風のふきうらかへす葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな  
よみ人しらす

秋といへはよそにそきこしあた人の我をふるせる名にこそありけれ  
わすらるゝ身をうちはしの中たえて人もかよはぬこしそへにける  
又はこなたかなたに人もかよはず

坂上是則

あふこをなからの橋のなからへて戀ひわたるまに年そへにける  
友則

うきなからけぬる泡こもなりなゝん流れてきたにたのまれぬ身は  
よみ人しらす



なかれてはいもせの山のなかにたつるよしのく川のよこや世の中

### 古今和歌集卷第十六

#### 哀傷歌

いもふこの身まかりける時よみける

小野篁朝臣

なくなみた雨ごふらなんわたり川みつまさりなはかへり来るかに

さきのたほきたほいまうちきみを白川のあたりにた

くりける夜よめる  
素性法師

ちのなみたちてそたきつ白川は君か世までの名にこそありけれ

ほりかはのたほきたほいまうちきみ身まかりにける

時にふか草の山にをさめてのちによみける



僧都勝延

うつ蟬はからを見つゝもなくさめつふか草のやまけふりたにたて  
かむつけのみねを

ふか草の野邊のさくらしこころあらは今年はかりはすみ染にさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家に

つかはしける

紀友則

ねても見ゆねても見えけり大かたはうつ蟬の世そ夢にはありける  
あひ知れりける人の身まかりにけれはよめる

紀貫之

夢こそいふへかりけれ世の中にうつゝあるものと思ひけるかな  
あひしれりける人の身まかりにける時によめる

壬生忠岑

ぬるか中に見るをのみやは夢といはんはかなき世をも現こは見す

あねのみまかりける時によめる

瀬をせけはふちとなりてもよこみけり別をこむるしからみそなき

藤原のたふさかむかしあひ知りて侍りける人の身

まかりにける時に吊ひにつかはすこてよめる

閑院

さきたゝぬくいのやちたひかなしきは流るゝ水のかへり來ぬなり

紀友則か身まかりにける時よめる 貫之

あす知らぬ我身こたもへこくれぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

忠岑

時しもあれあきやは人のわかるへきあるを見るたに戀しきものを

母かたもひにてよめる

九河内躬恒



かみなつき時雨にぬるゝもみち葉はたゝわひ人のたもこなりけり

父かたもひにてよめる 忠岑

ふちころもはつるゝいこはわひ人のなみたの玉のをこそなりける

たもひに侍りける年の秋山寺へまかりける道にてよ

める 貫之

朝つゆのたくての山田かりそめにうき世のなかをたもひぬるかな

たもひに侍りける人をこふらひにまかりてよめる

忠岑

すみそめの君かたもこは雲なれやたえすなみたのあめこのみ降る

女のたやのたもひにて山寺に侍りけるをある人のこ

ふらひつかはせりければ返事によめる

よみ人しらす

あしひきの山邊にいまはすみそめのころもの袖のひるこきもなし

諒闇のこし池のほこりの花を見てよめる

たかむらの朝臣

水のたもにしつく花の色さやかにも君かみかけのたもほゆるかな

深草のみかこの御國忌の日よめる 文屋康秀

草深きかすみのたにゝ影かくして日くれしけふにやはあらぬ

深草のみかこの御時に藏人の頭にてよるひるなれつ

かうまつりけるを諒闇になりにつれはさらに世にも

まじらすしてひえの山にのほりてかしらたろしてけ

りその又のこしみな人御ふくぬきてあるはかうふり

たまはりなごよろこひけるを聞てよめる

僧正遍昭



みな人ははなのころもになりぬなり苔のたもごよかわきたにせよ

河原のたほいまうちきみの身まかりての秋かの家の

ほごりをまかりけるに紅葉のいろまたふかくもなら

さりけるを見てかの家によみていれたりける

近院の右のたほいまうち君

打つけにさひしくもあるかもみち葉もぬしなき宿は色なかりけり

藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又のさしの夏

ほごきすのなきけるをきとてよめる

貫之

ほごきすけさなく聲にたごろけは君にわかれし時にそありける

櫻を植ゑてありけるにやうやく花咲きぬへき時にか

のうゑける人身まかりにければその花を見てよめる

きのもちゆき

花よりも人こそあたになりにつれいつれをさきに戀ひんごか見し

あるし身まかりにける人の家の梅花を見てよめる

貫之

色も香もむかしのこさににほへとも植ゑけん人のかけそこひしき

河原の左のたほいまうちきみの身まかりて後かの家

にまかりてありけるにしほかまこいふ所のさまをつ

くれりけるをみてよめる

君まさてけふりたえにし鹽かまのうらさひしくも見えわたるかな

藤原のさしもこの朝臣の右近中將にてすみ侍りける

さうしの身まかりて後人もすますなりにけるに秋の

よふけてものよりまうて來けるついでに見入れけれ



はもごありしせんさいいごしけくあれたりけるを見  
てはやくそこに侍りければむかしを思ひやりてよみ  
ける  
みはるのありすけ

君か植ゑしひごむらすくき蟲の音のしけき野邊ごもなりにける哉

これたかのみこの父の侍りけん時によめりけん歌ご  
もごごひければかきてたくりける奥によみてかけり  
ける  
友則

ごごならはごごの葉さへもきえなくん見れば涙のたきまさりけり  
題しらす  
よみ人しらす

なき人の宿にかよはくほごきすかけて音にのみなくごつけなむ  
誰見よごはなさけるらんしら雲のたつごはやくなりにしものを  
式部卿のみご閑院の五のみごにすみわたりけるをい

くはくもあらて女みこの身まかりにける時にかのみ  
このすみける帳のかたひらのひもにふみをゆひつけ  
たりけるをこりて見ればむかしの手にて此歌をなん  
かきつけたりける

かすくに我をわすれぬものならば山のかすみをあはれごは見よ  
男のひごの國にまかりけるまに女にはかにやまひを  
していごよわくなりける時よみたきて身まかりに  
ける  
よみ人しらす

輝をたにきかてわかるく玉よりもなきごごにねんきみそかなしき  
やまひにわつらひ侍りける秋ごごちのたのもしけな  
くたほえければよみて人のもごにつかはしける

大江千里



もみち葉を風にまかせて見るよりもはかなき物はいのちなりけり

身まかりなんごてよめる

藤原これもこ

露をなごあたなるものこたもひけん我身もくさにたかぬはかりを

やまひしてよわくなりにはける時よめる

業平朝臣

つひにゆく道ごはかねてきくしかご昨日けふごはたもはさりしを

甲斐國にあひ知りて侍りける人ごふらはんごてまか

りけるみちなかにてにはかにやまひをしていまいま

ごなりにければよみて京にもてまかりて母に見せよ

ごいひて人につけ侍りける歌

在原しけはる

かりそめのゆきかひちごそ思ひこし今はかきりのかごてなりけり

### 古今和歌集卷第十七

#### 雑歌上

題しらす

よみ人しらす

我うへにつゆそたくなるあまの川ごわたるふねのかひのしつくか

たもふごちまごのせる夜は唐錦たごまくをしきものにそありける

うれしきをなにとつごまん唐衣たもごゆたかにたてごいはましを

かきりなき君かためにご折るはなは時しもわかぬ物にそありける

ある人のいはく此歌はさきのたほきたほいまうちきみの

なり

むらさきの一もごゆゑにむさし野の草はみなからあはれごそ見る



めのたごうごをもて侍りける人にうへのきぬをたく  
るこてよみてやりける

業平朝臣

むらさきの色こきこきはめもはるにのなる草木そわかれさりける  
大納言藤原のくにつねの朝臣宰相より中納言になり  
ける時にそめぬうへのきぬのあやをたくるこてよめ  
る  
近院の右のたほいまうちきみ

いろなしこひこや見るらん昔よりふかきころにそめてしものを  
いそのかみのなむまつか宮つかへもせていそのかみ  
こいふ所にこもり侍りけるをにはかにかうふりたま  
はれりければよろこひいひつかはすこてよみてつか  
はしける  
ふるのいまみち

日のひかりやふしわかねはいそのかみふりにし里に花もさきけり

二條のきささきのまた東宮のみやすむ所ご申ける時に

たほはら野にまうてたまひける日よめる

業平朝臣

たほはらや小鹽のやまもけふこそは神代のこともたもひいつちめ  
五節の舞ひめを見てよめる  
よしみねのむねさた  
あまつ風雲のかよひち吹きこちよをこめのすかたしはしこくめん  
五節のあしたにかんさしの玉のたちたりけるを見て  
たかならんこくふらひてよめる

河原の左のたほいまうちきみ

ぬしやたれこへこしら玉いはなくにさらはなへてや哀こたもはん  
寛平御時にうへのさふらひに侍りけるをのこごもか  
めをもたせてきさいの宮の御かたにたほみきのたろ



しこきこえにたてまつりたりけるをくら人ごもわら  
ひてかめをたまへにもていとごもかくもいはすな  
りにければつかひのかへりきてさなんありつるごい  
ひければくら人のなかにたくりける

敏行朝臣

たまたれのこかめやいつらこよろきの磯の浪わけ沖にいてにけり  
女ごもの見てわらひければよめる けんけい法師  
かたちこそみ山かくれのくち木なれこころは花になさはなりなん  
方たかへに人の家にまかれりける時にあるしのきぬ  
をさせたりけるをあしたにかへすこてよみける

紀友則

蟬の羽のよるのころもはうすけれごうつり香こくも匂ひぬるかな

題しらす

よみ人しらす

たそく出る月にもある哉あしひきの山のあなたをしむへらなり  
我こころなくさめかねつさらしなやはすて山にてるつきをみて

業平朝臣

たほかたは月をもめてしこれそのつもれは人のたいごなるもの  
月たもしろしこて九河内躬恒かまうてきたりけるに

紀貫之

かつみれごうごくもあるかな月影のいたらぬ里もあらしご思へは  
いけに月の見えけるをよめる

ふたつなきものご思ひしをみなそこにやまのはならていつる月かけ

題しらす

よみ人しらす

あまの川くものみをにてはやければひかりごめす月そなかる



あかすして月のかくるゝ山もこはあなたたもてそこひしかりける  
これたかのみこのかりしけるごもにまかりてやこり  
にかへりて夜ひこよさけをのみ物かたりをしけるに  
十一日の月もかくれなんごしけるをりにみこゑひて  
うちへいりなんごしければよみ侍りける

業平朝臣

あかなくにまたきも月の隠るゝか山のはにけていれすもあらなん  
田村のみかこの御時に齋院に侍りけるあきらけい子  
のみこをはゝあやまちありこいひて齋院をかへられ  
んごしけるをそのここやみにければよめる

あま敬信

大そらをてりゆく月しきよければくもかくせごもひかりけなくに

題しらす

よみ人しらす

いそのかみふるからをのゝもごかしはもごの心はわすられなくに  
いにしへの野中のしみつぬるれごもごのこゝろを知る人そくむ  
いにしへのしつのをたまき賤しきもよきもさかりはありし物なり  
今こそあれ我もむかしはをこ山さかゆくごきもありこしものを  
世の中にふりぬるものは津の國のなからのはしごわれごなりけり  
さゝの葉にふりつむ雪のうれをたもみ本くたちゆく我さかりはも  
たほあらしきの森のした草たぬれはこまもすさめすかる人もなし  
又はさくらあさのたふのした草たぬれは  
敷ふれはごまらぬものをこしごいひて今年はいたく老そしにける  
たしてゐるやなにはのみつにやく鹽のからくも我はたいにけるかな  
又はたほごものみつのはまへに



たいらくのこむご知りせは門さしてなしご答へてあはさらましを  
この三つの歌は昔ありけるみたりのたきなのよめるごな  
ん

さかさまに年もゆかなんごりもあへすすくる齡やごもにかへるご  
ごりごむるものにしあらねは年月をあはれあなうご過しつるかな  
ごごめあへすむへもごしごはいはれけりしかもつれなく過る齡か  
かごみ山いさたちより見てゆかん年へぬる身はたいやしぬるご

この歌はある人のいはく大伴黒主かなり  
業平朝臣の母のみこなかをかにすみ侍りける時に業  
平みやつかへすごて時々もえまかりごふらはす侍り  
ければしはすはかりにはごのみこのもごよりごみの  
事ごてふみをもてまうて來たりあけてみれば言葉は

なくてありけるうた

たいぬれはさらぬ別もありごいへはいよく見まくほしき君かな

返し

業平朝臣

世の中にさらぬわかれのなくもかな千代もごなけく人のこのため

寛平御時ささいの宮の歌合のうた

在原棟梁

しら雪のやへふりしけるかへるやまかへるごも老いにけるかな

たなし御時うへのさふらひにてをのこごもにたほみ

き給ひてたほみあそひありけるついでにつかうまつ

れる

敏行朝臣

たいぬごてなごか我身をせめきけんたいすはけふにあはまし物か

題しらす

よみ人しらす



ちはやふるうちの橋もりなれをしそあはれごは思ふ年のへぬれは  
我みてもひさしくなりぬすみの江の岸のひめまついく世へぬらん  
すみよしの岸のひめまつ人ならはいく世か經しごはまじものを  
あつさ弓いそへの小松たか代にかよろつよかねてたねをまきけん

この歌はある人のいはく柿本の人まろかなり

かくしつゝ世をやつくさん高砂のをのへにたてるまつならなくに

藤原興風

たれをかも知る人にせんたかさこの松もむかしのごもならなくに

よみ人しらす

わたつ海の沖つしほ合にうかふ泡のきえぬものからよる方もなし  
わたつ海のかさしにさせる白妙のなみもてゆへるあはちしまやま  
わたのはらよせくる浪のしはくも見まくのほしきたまつ島かも

なにはかたしほみちくらしあま衣たみのゝしまにたつなきわたる

貫之かいつみの國に侍りける時にやまごより越えま

うて来てよみてつかはしける 藤原たふさ

君をたもひたきつの濱になくたつの尋ねくれはそありごたにきく

返じ 貫之

たきつ浪たかしの濱のはまゝつの名にこそきみをまちわたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

難波かたたふるたまもをかりそめのあまこそ我はなりぬへらなる

あひ知れりける人のすみ吉にまうてけるによみてつ

かはしける 壬生忠岑

すみよしごあまはつくごもなかるすな人わすれ草たふごいふなり

難波へまかりける時たみのゝ島にて雨にあひてよめ



る

貫之

雨によりたみのゝ島をけふゆけはなにはかくれぬ物にそありける  
法皇西川にたはしましたりける日鶴洲に立てりこい  
ふこころを題にてよませ給ひける

あしたつのたてる川邊をふくかせによせてかへらぬ浪かこそ見る  
中勢のみこの家の池に船をつくりてたろしはしめて  
あそひける日法皇御覽しにたはしましたりけりゆふ  
さりつかたかへりたはしまさんごしけるをりによみ  
てたてまつりける

伊勢

水のうへにうかへる船のきみならはこころそこまりこいはまじ物を  
からこころいふ所にてよめる  
真せい法師  
みやこまでひききかよへるからこころは浪のをすけて風そひきける

布引の瀧にてよめる

在原行平朝臣

こきちらす瀧のしらたまひろひたきて世のうきごきの涙にそかる  
布引の瀧のもこにて人々あつまりて歌よみけるごき  
によめる  
業平朝臣

ぬきみたる人こそあるらししら玉のまなくもちるか袖のせはきに  
吉野の瀧を見てよめる  
承均法師

たかためにひきてさらせる布なれや世をへて見れこころ人のなき  
題しらす  
神たい法師

きよたきの瀧々のしら糸くりためて山わけころもたりてきまじを  
龍門にまうてきたきのもこにてよめる

伊勢

たちぬはぬ衣きしひこもなきものをなに山ひめのぬのさらすらん



朱雀院の御門ぬのひきの瀧御覽せんごてふん月のな

ぬかの日ははしましてありける時にさふらふ人々に

歌よませたまひけるによめる たちはなのなかもり

ぬしなくてさらせる布をたなはたに我ころこやけふはかさまじ

ひえの山なる音羽の瀧を見てよめる

忠岑

たちたきつ瀧のみなかみごしつもり老いにけらしな黒きすちなし

たなしたきをよめる 躬恒

風ふけごころも去らぬしら雲は世をへて落つる水にそありける

田むらの御時に女はうのさふらひにて御屏風の繪御

覽しけるにたき落ちたりける所たもしろしこれを題

にて歌よめごさふらふ人にてほせられければよめる

三條の町

たもひせくごころの中のときなれやたつごは見れご音のきこえぬ

屏風のゑなる花をよめる 貫之

咲きそめごきよりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風のゑによみあはせてかきける 坂上是則

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうければ



古今和歌集卷第十八

雑歌下

題しらす

よみ人しらす

世の中は何かつねなるあすかゝはきのふのふちそ今日はせになる  
いくよしもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思ひみたる  
雁の來るみねのあさきりはれすのみ思ひつきせぬ世のなかのうさ

小野篁朝臣

しかりさてそむかれなくにここしあれはまつ嘆かれぬあなう世中  
甲斐守に侍りける時京へまかりのほりける人につか  
はしける  
をのゝさたき



みやこ人いかにこゝはと山たかみはれぬくも井にわふこたへよ

文屋のやすひてか三河のそうになりてあかた見には

えいてたゞしやこいひやれりける返事によめる

小野小町

わひぬれは身を浮草の根をたえてさそふ水あらはいなんこそ思ふ

題しらす

あはれてふこごそうたて世の中を思ひはなれぬほたしなりけれ

よみ人知らず

あはれてふ言の葉ごごにたぐ露はむかしをこふるなみたなりけり

世のなかのうきもつらきもつけなくにまつ知るものは涙なりけり

よの中はゆめかうつゝかうつゝこも夢ごもしらすありてなければ

世の中にいつら我身のありてなし哀ごやいはんあなうごやいはん

山里は物のさひしきごごそあれ世のうきよりはすみよかりけり

これたかのみこ

白雲のたえすたなひく嶺にたに住めはすみぬる世にこそありけれ

ふるのいまみち

しりにけんきごてもいごへ世の中は浪のさわきにかせそしくめる

素性

いつくにか世をはいごはん心こそ野にもやまにもまごふへらなれ

よみ人知らず

世の中はむかしよりやはうかりけん我身ひごつのためになれるか

よのなかをいごふ山邊のくさ木ごやあなうの花の色にいてにけん

みよし野の山のあなたにやごもかな世のうき時のかくれかにせん

世にふれはうさこそまされみよし野の岩のかけ道ふみならしてん



いかならんいはほの中にすまはかは世のうき事のきこえこさらん  
あじひきの山のまに／＼かくれなんうき世の中はあるかひもなし  
世の中のうけくにあきぬたく山の木の葉にふれるゆきやけなまし  
たなしもしなき歌  
ものゝへのよしな

世のうきめ見えぬ山路へいらんには思ふひここそほたしなりけれ  
やまのほうこのもこへつかはしける

九河内野恒

よをすてゝ山にいる人やまにてもなほうきこきはいつちゆくらん  
物たもひける時いこきなきこを見てよめる

今更になにたひいつらん竹の子のうきふししけき世は知らすや  
題しらす  
よみ人しらす

世にふれは言の葉しけきくれ竹のうきふしここにうくひすそなく

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬへらなり

ある人のいはくたかつのみこの歌なり

わか身からうき世の中こなけきつゝ人のためさへかなしかるらん  
たきの國になかされて侍りける時によめる

たかむらの朝臣

思ひきや鄙のわかれにたごろへてあまのなはたきいさりせんこは

田むらの御時に事にあたりて津の國のすまこいふこ  
ころにこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人につ  
かはしける  
在原行平朝臣

わくらはにこふ人あらは須摩の浦にもしほたれつゝわふこ答へよ  
左近將監さけて侍りける時に女のごふらひにたこせ  
たりける返事によみてつかはしける



をのゝはるかせ

あまひこのたごつれしこそ今は思ふ我かひごかご身をたごる世に  
つかさごけて侍りける時よめる 平さたふん

うき世には門させりとも見えなくなごか我身のいてかてにする  
ありはてぬいのちまつまの程はかりうきごごしけく思はずもかな  
みこの宮のたちはきに侍りけるを宮つかへつかうま  
つらすごてごけて侍りける時によめる

みやちのきよき

つくはねのこのもごごごにたちそよる春のみ山のかげをこひつご  
時なりける人のはかに時なくなりてなけくを見て  
みつからのなけきもなくよろこひもなきごごを思ひ  
てよめる

清原深養父

ひかりなき谷にははるもよそなれは咲きてごく散るもの思もなし  
かつらに侍りける時に七條中宮ごはせ給へりける御  
返事にたてまつれりける

伊勢

ひさかたの中にとひたる里なれはひかりをのみそたのむへらなる  
紀のごしきたかあはのすけにまかりける時にうまの  
はなむけせんごてけふごいひたくれりける時にごご  
かごごにまかりありきて夜ふくるまで見えさりけれ  
はつかはしける

業平朝臣

今そしるくるしきものご人またんさごをはかれすごふへかりけり  
これたかのみこのもごにまかりかよひけるをかしら  
たろしてをのごいふ所に侍りけるに正月にごふらは  
んごてまかりたりけるにひえの山の麓なりければ雪



いと深かりけりしひてかの室にまかりいたりてをか  
みけるにつれくこしていと物かなしくてかへりま  
うて来てよみてたくりける

忘れてはゆめかこそ思ふたもひきや雪ふみわけてきみを見んこは

深草のささにすみ侍りて京へまうてくこてそこなり

ける人によみてたくりける

年を経てすみこしさこをいてくいなはいこく深草野こやなりなん

返し

よみ人しらす

野こならはうつらこなきて年は経んかりにたにやは君はこさらん

題しらす

我を君なにはのうらにありしかはうきめをみつのあまこなりにき

この歌はある人むかしをここありけるをうなのをこここ

はすなりにければなにはのみつの寺にまかりあまになり  
てよみてをここにつかはせりけるこなんいへる

返し

難波瀉うらむへさまも思ほえすいつこをみつのあまこかはなる

いまさらにごふへき人もたもほえすやへむくらして門させりてへ

こもたちの久しうまうてこさりけるもこによみてつ

かはしける

野恒

水の面にたふるさつきのうき草のうきここあれやねをたえて來ぬ

人をこはて久しうありけるをりにあひうらみければ

よめる

身をすてくゆきやしにけんたもふよりほかなるものは心なりけり

むねをかのとほよりかこしよりまうてきたりける時



に雪のふりけるを見てをのか思ひはこの雪のごとく  
つもれるこいひけるをりによめる

君かたもひ雪ごつもらはたのまれす春よりのちはあらしご思へは

返し

宗岳大頼

君をのみたもひこしちのしら山はいつかはゆきのきゆるごきある

こしなりける人につかはしける 紀貫之

たもひやるここの白山しらねごもひご夜もゆめにこえぬよそなき

題しらす

よみ人しらす

いさごくに我世はへなんすかはらやふしみの里のあれまくをし  
わか庵はみわのやまもごこひしくはごふらひきませ杉たてるかご

喜撰法師

わかいははみやこのたつみしかそすむ世をうち山ご人はいふなり

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよの宿なれやすみけん人のたごつれもせぬ

奈良へまかりける時にあれたる家に女の琴ひきける

をきくてよみて入れたりける よしみねのむねさた

わひ人のすむへきやご見るなへになけきくはるる琴の音そする

はつせにまうつる道に奈良の京にやこれりける時よ

める

二條

ひごふるすさをいとひてごしかごもならの都もうき名なりけり

題しらす

よみ人しらす

世の中はいつれかさしてわかならんゆきごまるをそ宿ごさたむる  
あふ坂のあらしの風はさむけれごゆくへしらねはわひつごそぬる  
風の上にありかさためぬ塵のみはゆくへもしらすなりぬへらなり



家をうりてよめる

伊勢

あすか川ふちにもあらぬ我やこもせにかはりゆく物にそありける  
つくしに侍りける時にまかりかよひつゝ暮うちける  
人のもごに京にかへりまうて来てつかはしける

紀友則

故郷は見しこもあらずをのゝえのくちしこころそ戀しかりける  
女ごもたちご物かたりしてわかれて後につかはしけ  
る

みちのく

あかさりし袖の中にや入りにけんわかたましひのなきこゝちする  
寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍りける  
時に東宮のさふらひにてをのこもさけたうへける  
ついてによみ侍りける

藤原のたふさ

なよ竹のよなかきうへにはつ霜のたきゐてものをたもふころかな  
題しらす

よみ人しらす

風ふけはたきつしら浪たつたやま夜半にやきみかひこりこゆらん  
ある人この歌はむかし大和國なりける人のむすめにある  
人すみわたりけるこの女親もなくなりて家もわろくなり  
ゆくあひたこの男かうちの國に人をあひしりてかよひつ  
つかれやうにのみなりゆきけりさりけれもつらけなる  
けしきも見えて河内へいくこごに男の心のこごくにしつ  
ついたしやりければあやしと思ひてもしなきまにこご心  
もやあると疑ひて月のたもしろかりける夜河内へゆくま  
ねにてせんさいのなかにかくれて見ければ夜ふくるまで  
琴をかきならしつゝ打嘆きてこの歌をよみてねにければ



是をきゝてそれより又ほかへもまからすなりにけりこな  
んいひつたへたる

たかみそきゆふつけ鳥かからころもたつたの山にをりはへてなく  
わすられん時しのへこそはまちよりゆくへも知らぬ跡をこゝむる

貞観御時万葉集はいつはかりつくれるそこはせた

まひければよみてたてまつりける 文屋ありすゑ

かみな月しくれふりたけるならの葉のなにもふ宮のふる言それ

寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける

大江千里

あしたつのひごりたくれてなく津は雲のうへまできこえつかなん

ふちはらのかちをん

人知れすたもふことろは春かすみたちいてゝ君かめにも見えなん

歌めしける時にたてまつるこてよみてたくにかきつ

けてたてまつりける

伊勢

山川のたごにのみきくもゝしきを身をはやなから見るよしもかな



古今和歌集卷第十九

雜體

短歌

題しらす

よみ人しらす

あふことこの まれなる色に たもひそめ わか身はつねに あま  
 雲の はると時なく ふしのねの もえつゝとはに 思へとも  
 あふことかたし なにしかも 人をうらみん わたつみの たき  
 をふかめて たもひてし 思ひはいまは いたつらに なりぬへ  
 らなり ゆく水の たゆる時なく かくなわに 思ひみたれて  
 ふる雪の けなはけぬへく たもへとも えふの身なれば 猶や



ます 思ひはふかし、あしひきの 山した水の 木かくれて た  
きつ心を たれにかも あひかたらはん 色にいては 人しりぬ  
へみ 墨そめの ゆふへになれは ひこり居て あはれくこ  
なけきあまり せんすへなみに にはに出て たちやすらへは  
しろたへの 衣の袖に たく露の けなはけぬへく 思へとも  
猶なけれぬ 春かすみ よそにも人に あはれこたもへは  
ふるうたゝてまつりし時のもくろくのそのなかうた

貫之

ちはやふる 神のみよより くれ竹の 世々にもたえす あまひ  
この たこはの山の 春かすみ たもひみたれて さみたれの  
空もごころに さよふけて 山ほごきす なくごごに たれも  
ねさめて からにしき たつたの山の もみち葉を 見てのみし

のふ 神無月 じくれくして 冬の夜の 庭もはたれに ふる雪  
の 猶きえかへり じごごに 時につけつゝ あはれてふ こ  
ごをいひつゝ 君をのみ ちよにこいはふ 世の人の たもひす  
るかの 富士のねの もゆる思も あかすして 別るゝなみた  
ふちころも たれる心も 八千草の こごのはごごに すへらき  
の たほせかしこみ まきくの 中につくすご いせの海の  
浦のしほかひ ひろひあつめ されりごすれご 玉の緒の みし  
かき心 思ひあへす 猶あらたまの 年をへて 大みやにのみ  
又かたの ひるよるわかす つかふごて かへりみもせぬ わか  
やごの しのふ草たふる いたまあらみ ふる春雨の もりやし  
ぬらん

ふる歌にくはへてたてまつれるなかうた



壬生忠岑

くれ竹の よくのふるこご なかりせは いかほのぬまの いか  
 にして 思ふ心を のはへまし あはれむかしへ ありきてふ  
 人まろこそは うれしけれ 身はしもなから ここの葉を あま  
 つ空まで きこえあけ すゑの世までの あさくなし 今もたほ  
 せの くだれるは ちりにつけこや ちりの身に つもれるこご  
 を こはるらん これを思へは、いにしへも くすりけかせる  
 けたものゝ 雲にほえけん 心地して ちくのなさけも たもほ  
 えす ひこつ心そ ほこらしき かくはあれこも てるひかり  
 ちかきまもりの 身なりしを たれかは秋の 來るかたに あさ  
 むきいてゝ みかきより こへのもる身の みかきもり たさた  
 さしくも たもほえす ここのかさねの なかにては 嵐のかせ

も きかさりき 今は野山し ちかければ 春はかすみに たな  
 ひかれ 夏はうつせみ なきくらじ 秋はしくれに 袖をかじ  
 冬は霜にそ せめらるゝ かくるわひしき 身なからに つもれ  
 る年を しろせれば いつゝのむつに なりにけり これにそは  
 れる わたくしの たいのかすさへ やよければ 身はいやし  
 て こしたかき ここの苦しき かくしつゝ なからの橋の な  
 からへて なにはの浦に たつなみの なみのしはにや たほゝ  
 れん さすかに命 をしければ ここの國なる しら山の かじ  
 らはしろく なりぬとも たごはの瀧の 音にきく たいすしな  
 すの くすりもか 君かやちよを わかえつゝ見ん  
 君か世にあふさか山のいはしみつ木かくれたりこたもひけるかな

冬のなか歌

九河内躬恒



ちはやふる 神無月ごや けさよりは くもりもあへす うちし  
くれ 紅葉ごもに ふるさこの 吉野の山の 山あらしも さ  
むく日毎に なりゆけは 玉のをこけて こきちらし あられみ  
たれて しもこほり いやかたまれる 庭のたもに むらく見  
ゆる 冬くさの うへに降りしく しら雪の つもりくて あ  
らたまの 年をあまたも すくしつる哉

七條のきさきうせたまひにける後によみける

伊勢

たきつなみ あれのみまさる 宮のうちには 年へてすみし いせ  
のあまも 船なかしたる 心地して よらんかたなく かなしき  
に 涙のいろの くれなるは われらかなかの 時雨にて 秋の  
もみちご 人々は をのちりく わかれなは たのむかけな  
く なりはてゝ こまる物ごは はなすゝき 君なき庭に むれ  
たちて 空をまねかは はつかりの なきわたりつゝ よそにこ  
そ見め

旋頭歌

題しらす

よみ人しらす

うちわたすをちかた人に物まうす我そのそこにしろくさけるはな  
にのはなそも

返し

春されは野邊にまつさく見れごあかぬ花まひなしにたくなのるへ  
き花のなぐれや

題しらす

はつせ川ふるかはのへにふたもごあるすき年を経て又もあひ見ん



二もごあるすき

貫之

君かさすみかさの山のもみち葉のいろ神無月しくれの雨のそめる  
なりけり

誹諧歌

題しらす

よみ人しらす

梅のはな見にこそきつれうくひすのひさくくごいごひしもをる

素性法師

山吹のはないろころもぬしやたれさへごこたへすくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくはくの田をつくれはかほごきすしてのたをさを朝なくよふ

七月六日たなはたのころをよみける

藤原兼輔

いつしかごまたくころをはきにあけて天の河原をけふや渡らん

題しらす

九河内躬恒

むつごもまたつきなくに明ぬめりいつらは秋のなかしてふ夜は

僧正遍昭

秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしかまし花もひごき

よみ人しらす

秋くれは野邊にたはるゝをみなへしいつれの人かつまで見るへき  
あき霧のはれてくもれはをみなへし花のすかたそ見えかくれする  
花と見て折らんごすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

在原むねやな

あき風にほころひぬらし藤はかまつりさせてふきりくすなく



あす春たぐんこしける日ごなりの家のかたより風の  
雪をふきこしけるを見てそのごなりへよみてつかは

しける

清原深養父

冬なからはるのごなりのちかければ中かきよりそはなはちりける

題しらす

よみ人しらす

いそのかみふりにしこひの神さひてたぐるに我はいそねかねつる  
枕よりあごよりこひのさめ來ればせんかたなみそごこなかにをる  
こひしきかかたも方こそありききけたてれをれごもなき心ちする  
ありぬやごころみかてらあひみねはたはふれにくきまでそ戀しき  
みよなしの山のくちなしえてしかなたもひの色のしたそめにせん  
あし引の山田のそほつたのれさへ我をほしごいふうれはしきごご  
きのめのご

富士のねのならぬたもひにもえはもえかみたにけたぬむなし煙を

きのありごも

あひみまくほしは數なくありなから人につきなみまごひこそすれ

小野小町

人にあはんつきのなきには思ひたきてむねはしりひに心やけをり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 藤原興風

はるかすみたなひく野邊の若菜にもなり見てしかな人もつむやご

題しらす

よみ人しらす

たもへごも猶うごまれぬはるかすみかくらぬ山のあらしご思へは

平貞文

春の野のしけき草葉のつまごひにごひたつきしのほろごそなく

きのよしひご



秋の野につまなき鹿のこしをへてなそわかこひのかひよこそなく

野恒

せみのはのひこへにうすき夏衣なればよりなんものにやはあらぬ

忠岑

かくれぬの下よりたふるねぬなはのねぬなはたしくくるないこひそ

よみ人しらす

こごならは思はずこやはいひはてぬなそ世の中のたまたすきなる  
思ふてふ人のこころのくまこごにたちかくれつと見るよしもかな  
たもへこも思はずこのみいふなれはいなやたもはし思ふかひなし  
我をのみ思ふこいはとあるへきをいてやこころはたほぬさにして  
われを思ふ人をたもはぬむくいにやわかたもふ人の我をたもはぬ

ふかやふ

たもひけん人をそごもに思はましまさしやむくいなかりけりやは

よみ人しらす

いてとゆかん人をこごめんよしなきに隣のかたにはなもひぬかな  
くれなるにそめし心もたのまれすひごをあくにはうつるてふなり  
いとはると我身ははるの駒なれやのかひかてらにはなちすてつる  
うくひすのこそそのやごりのふるすこや我には人のつれながるらん  
さかしらに夏はひこまねさとの葉のさやく霜夜をわかひごりぬる

平中興

あふここの今ははつかになりぬれば夜深からてはつきなかりけり

左のたほいまうちきみ

もろここのよしのと山にこもるごもたくれんと思ふ我ならなくに

なかき



雲はれぬあさまのやまのあさましや人のこころを見てこそやまめ

伊勢

難波なるなからのはしもつくるなり今はわか身をなにくたへん

よみ人しらす

まめなれごなにそはよけくかる萱の亂れてあれごあしけくもなし

興風

何かその名のたつことのをしからんしりてまごふは我ひとりかは

いごこなりけるをごこによそへて人のいひければ

くそ

よそなから我身にいごのよるごいへはたごいつはりやすくはかり也

題しらす

さぬき

ねきごをさのみきくけん社こそはてはなけきのもりごなるらめ

大輔

なけきこる山ごし高くなりぬれはつらつるのみそまつゝかれける

よみ人しらす

なけきをはこりのみつみて足曳のやまのかひなくなりぬへらなり

人こふるごをたもにごになひもてあふごなきこそ侘しかりけれ

よひのまにいてゝ入ぬる三日月のわれてもの思ふころにもある哉

そへにごてごすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

世の中のうきたひごに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ

在原元方

世の中はいかにくるしご思ふらんこゝらのひごにうらみらるれは

よみ人しらす

なにをして身のいたつらにたいぬらん年の思はんごごそやさごき



興風

身はすてつ心をたにもはふらさこつひにはいかくなるこ知るへく

千里

しら雪のこもにわか身はふりぬれこ心はきえぬものにそありける

題しらす

よみ人しらす

梅のはなさきてののちの身なればやすきものこのみ人のいふらむ

法皇西川にたはしましたりける日猿山の峽に叫ぶこ

いふこを題にてよませたまふける

躬恒

わひしらにまじらななきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

題しらす

よみ人しらす

世をいこひこのもここに立よりてうつふしそめの麻のきぬなり

古今和歌集卷第二十

大歌所御歌

たほなほひのうた

あたらしき年のはじめにかくしこそ千年をかねてたのこきをつめ

日本記にはつかへまつらめよろつ代までに

ふるきやまごまひの歌

しもこいふかつらき山にふる雪のまなくこきなくたもほゆるかな

あふみふり

近江より朝たちくれはうねの野にたつそなくなる明けぬこのよは

みつつきふり



水くきのをかのやかたにいもごあれこねての朝けの霜のふりはも

しはつ山ふり

しはつ山うちいてゝ見れはかさゆひの島こきかくるたなゝし小船

神あそひのうた

こりものゝうた

神かきのみむろの山のさか木はゝかみの御前にしけりあひにけり  
霜やたひたけさかれせぬさかき葉のたちさかゆへき神のきねかも  
まきもくのあなしの山のやまごひこも見るかにやまかつらせよ  
み山にはあられふるらしごやまなるまさきのかつら色つきにけり  
みちのくのあたちのまゆみわかひかは末さへよりこしのひくゝに  
わかゝごのいた井のしみつ里さほみ人しくまねはみ草たひにけり  
ひるめのうた

さゝのくまひのくま川に駒ごめてしはしみつかへかけをたに見ん

かへしものゝ歌

あをやきをかた糸によりてうくひすの縫ふてふ笠はうめの花かさ  
まかねふくきひの中山たひにせるほそたにかはのたごのさやけさ

此うたは承和の御へのきひのくにの歌

みまさかやくめのさら山さらゝに我名はたてしよろつ代までに

これは水のをの御へのみまさかのくにの歌

みのゝ國せきのふちかはたえすして君につかへんよろつよまてに

これは元慶の御へのみのゝ歌

きみか世はかきりもあらしなかはまの真砂の数はよみつくすこも

これは仁和の御へのいせのくにのうた

大伴黒主



あふみのやかゝみの山をたてたれはかねてそ見ゆるきみか千年は  
これは今上の御へのあふみのうた

東歌

みちのくうた

あふくまに霧たちくもり明けぬとも君をはやらしまてはすへなし  
みちのくはいつくはあれと蘆かまのうらくく船のつなてかなしも  
わかせこをみやこにやりてしほかまのまかきの島のみつそ戀しき  
をくろさきみつのこしまの人ならば都のつこにいさこいはましを  
みさふらひみかさこ申せみやきの木のした露はあめにまされり  
もかみ川のほれはくたるいな船のいなにはあらすこのつきはかり  
君をたきてあたしこゝろをわかもたは末のまつやま浪もこえなん  
さかみうた

こよろきの磯たちならしいそなつむめさしぬらすな沖にをれなみ

ひたちうた

筑波ねのこのもかのもにかけはあれと君かみかけにますかけはなし  
つくはねの嶺のもみち葉落つもりしるも知らぬもなへてかなしも

かひうた

かひかねをさやにも見しかけくれなくよこをりふせるさやの中山  
甲斐かねをねこし山こしふく風をひこにもかもやこごつてやらん

伊勢うた

たふの浦に片枝さしたほひなる梨のなるもならずもねて語らはん

冬の賀茂のまつりの歌

藤原敏行朝臣

ちはやふるかものやしらの姫小松よろつ世ふともいろはかはらし



家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

卷第十 物名部

ひくらし

貫之

そま人はみや木ひくらしあしひきの山のやまひこよひこよむなり

在郭公下 空蟬上

勝臣

かけりてもなにをかたまの來ても見んからはほのほと成にし物を

をかたまの木 友則下

くれのたも

貫之

こし時こひつゝをれはゆふくれのたもかけにのみ見えわたる哉

忍草 利貞下



たきのゐ みやこしま

小野小町

たきのゐて身をやくよりもかなしきはみやこしまへの別なりけり

からこご 清行下

そめごの あはた

あやもち

うきめをはよそめごのみそのかれゆく雲のあはたつ山のふもごに

この歌は水のをのみかごのそめごのよりあはたへうつり

たまうける時によめる

桂宮下

卷第十一

奥山の管の根しのきふる雪下

けふ人をこふることろはたほ井川なかるゝみつにたごらさりけり

わきもごにあふさか山のしのすゝきほにはいてすも纏わたるかな

卷第十三

こひしくは下にをたもへ紫の下

いぬかみのごこの山なるいさや川いさごこたへよわか名もらすな

この歌ある人あめのみかごのあふみのうねめにたまへる

ご

返し

うねめのたてまつれる

山しなのたごはの瀧のたごにたにひごのしるへくわかこひめやも

卷第十四

たもふてふごごのはのみや秋をへて下

そごほりひめのひごりゐてみかごをこひたてまつり

て

我せこかくへきよひなりさくかにの蛛のふるまひかねてしるしも



深養父應しこはたかなつけくんことならん下

貴之

みちしらはつみにもゆかんすみのえの岸にたふてふこひわすれ草

明治四十二年三月廿二日印刷  
明治四十二年四月九日發行

正價壹圓貳拾錢

編者

中川恭次郎

東京市本郷區龍岡町三十四番地

發行者

田中増藏

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

印刷者

今井甚太郎

東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

印刷所

歌學書院印刷部

發行所

歌書刊行會

發兌元

東京本郷區千駄木林町一七二  
(電話下谷二七四五ノ甲)

歌學書院

255

234



